謹賀新年

よかネット YOKANET

No.67　2004. 1

㈱よかネット

もくじ

NETWORK

人もうけ通信19

“地域づくりなんでも相談会”という活動を始めています
ー現在、糸島と筑後川で進行中ー ---------- 2

高齢者はどこを終の住処とするのだろうか5
ＯＬ、ファミリー、高齢者など多様な人々が住み、集う
普通の暮らしがある「ケアハウス：ゴジカラ村」と「ぼちぼち長屋」 ---------- 6

第74回　地域ゼミ
地域にあった自然林の再生 ---------- 9

個族化社会のネットワーク形成②
個族化社会で“起きてしまっている未来”？
いや、1980年頃から始めていた過去の遺産？ ---------- 11

見・聞・食

やごろう苑見学報告
～熱心な家族会運営やリハビリで家庭復帰率アップを目指す～ ---------- 14

対州そば、インターネット交流体験記 ---------- 16

近況

宗像四塚縦走14kmで体力試し ---------- 17

地域づくりは人づくりから ---------- 18

大横綱の孫、あらわる ---------- 18

観光するなら案内してくれる人がいるのがうんといいと思った ---------- 19

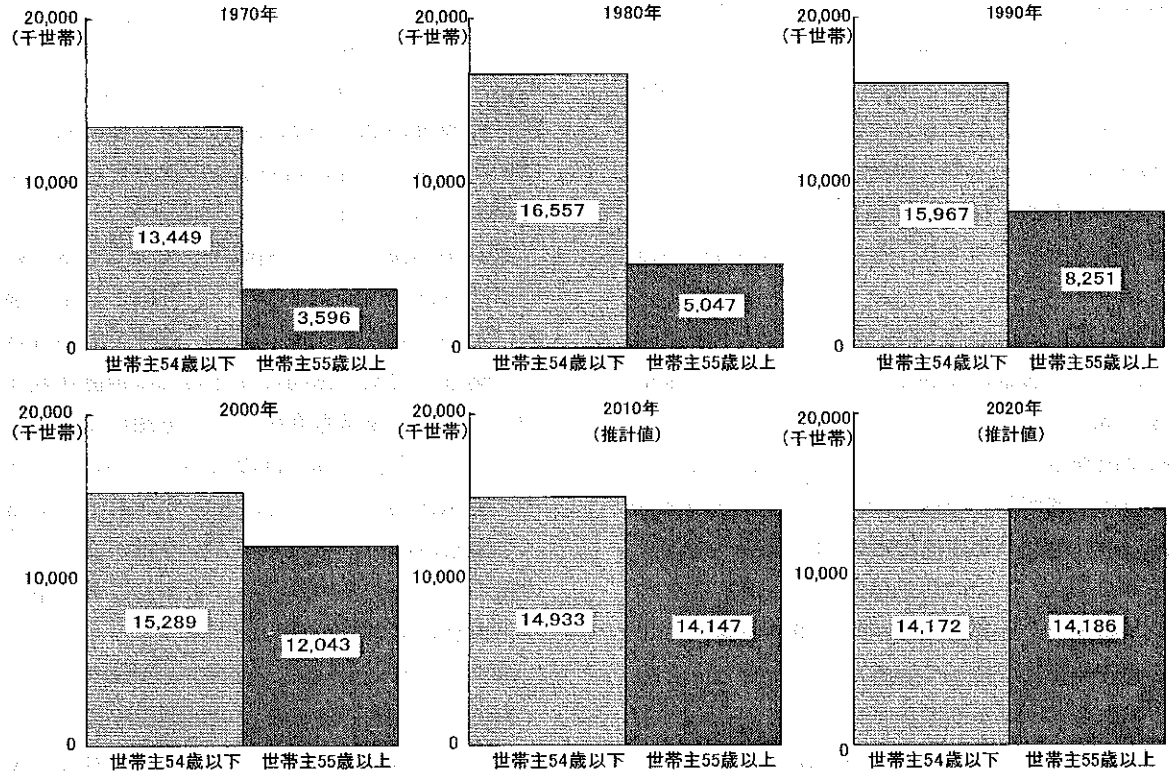
消費者の心は秋の空か？ ---------- 19

本・BOOKS

文化麺類学・ラーメン篇 ---------- 20

●若い核家族の大幅減（少子化の原因？）（本文11頁に関連記事）

核家族という言葉は、「両親と子どもたちのファミリー」を想像してしまうが、実態は大きく異なっている。
およそ子育てが終わる55歳を境に分けて年次推移をみてみると、本来の若い核家族（54歳以下）は減少し、
逆に高齢の核家族（55歳以上、高齢の二人暮らしなどの隠れた個族が多い）は増えている。
50歳を境にした場合は、若い核家族11,696世帯、高齢核家族15,636世帯と2000年には既に関係が逆転している。



資料：「国勢調査」、推計値は「日本の世帯数の将来推計」国立社会保障・人口問題研究所編

人もうけ通信　19

“地域づくりなんでも相談会”という活動を始めています

――現在、糸島と筑後川で進行中――

糸乘　貞喜、山田　龍雄、本田　正明

何かやってみたいことはありませんか
やって欲しいことはありませんか
解決しなきゃならない問題はありませんか
仲間と一緒に取り組んでみたいと思いませんか

こんな呼びかけのもとに、集まりがスタートしています。ここでは、集まった人々がそれぞれに、自分の思っていることや身近で起こっていること、困った問題などを話します。ひとわたりみんなが話を出したところで、質疑をしたり、他での似た話が出たりして問題が深まります。頃合いを見て、それぞれのテーマに対して声をかけます。

“このゆびと～まれ”という呼びかけで
チームが出来、取り組みが始まります
仲間と一緒に問題に取り組んだり、
それをビジネスに組み立ててみたい

そんな仲間の集まりが“地域づくりなんでも相談会”です。

●保証は何もない、リスク100%の地域づくりへの取り組み

今までは、「地域づくり」というと、①東京（本省）で何か良い事業制度が始まっていないか、②補助金をくれる制度はないか、③どこかで、うまくいっている事例はないか、④お互いが持っているシーズを出し合い、組み立ててうまい商品開発が出来ないか、などと言ったことで始まることが多かった。

つまり、失敗しない“コトおこし”、リスクをかぶらない“モノづくり”を考えるのが賢い方法だと思っていた。

私も、関西で仕事をしていた頃から、「産業おこし」という活動に参加していて、もう二十数年にもなる。しかし、メンバーそれぞれが、自分の会社で出来るシーズを持ち寄って組み合わせを考えていた。試作品や予備的なコトおこしは出来ても、なかなか商品化することは出来なかった。よく考えてみると、この活動はかなり手前勝手な考えで、顧客のことを考えるニーズ第一主義ではなく、自分の会社の持っているもの（シーズ）を金にしようとするばかりのエゴであった。

今回の「地域づくりなんでも相談会」の取り組みは、何の保証もなく、仲間でリスクは取り合わねばならない。

●ニードを頼りに、一歩一歩、リスクにならないぐらい堅実に、具体的に取り組んでみよう

「身近に起こっていることや自分の思っていることをそのままに･･･」と言っても、なかなか話しにくいようであったが、１人が「私のムラ（集落）の梅林が放置されているが･･･役に立てられないか」などと言い始めると、次々とニードや問題が出されてくる。

「家具が不況で･･･。外国から入ってくる安いものに押されて困っている」。「外国と賃金が違うわけだから同じ土俵ではダメ。百姓でもお客さんの“健康・安全”指向に支えられ産地直送販売をやっている。家具も客のニードを聞いて産直をやったらどうか。これだけの人がいるからネットワークも広がるし･･･」などという話も出てくる。

こんな話の中から、手が上がり指が立って「この指と一まれ」と発展する。しかしこれは単なるキッカケにすぎない。

スタートしてからは、個別プロジェクトのキーマンとメンバーの意欲が次の展開をきめる。とにかくニードはあるのだ。少なくとも「自分はやっ

てみたい」、「社会・お客さんが望んでいる“コト”であり“モノ”である」という思いを共有しながら進む。

リスクを減らすために、自分たちの時間を使い２人で集まり、皆で集まったりしながら進めていく。設備投資もできるだけしないように、ある建物や設備を使いながら、モノづくりやコトおこしをしていく。

“金があっても時間のない者”は特急料金を払って特急でいけばいい、“金のない者”は時間を使って金を極力節約する。これが「お金のリスクを時間でヘッジする」という仕組みではないだろうか。

この「なんでも相談会」は誰も保証してくれないし、単なる時間つぶしかもしれない。しかし「よい友・よいネットワーク」は得られるかもしれない。そんな楽しみがこの活動である。

（いとのり　さだよし）

地域づくりグループの悩み相談・交流の場が生まれつつある

～糸島まちづくりなんでも相談会～

糸島で地元の人たちが中心となって、自分たちで地域の問題を考えようという会をやっている。７月16日から始めたので、２ヶ月に１回のペースという無理をしないペースであるが、11月15日が３回目だった。糸島の地域づくりに関心のある人たちに集まってもらい、現在どんな地域問題があるか聞いてみようと、それぞれのつながりで声をかけあった。そのため、最初の会はいったいどれくらいの人が集まるのかまったく想像がつかなかったが、昔から住んでいる人が８名、移り住んだ人が８名、糸島に興味のある外部の人が４名と、公民館の会議室がちょうど埋まるほど集まった。

●自己紹介と「なんでも一言」を話し合ったら、「先週、区の婦人会が解散して・・・」などの問題やテーマが出てきた。

糸島は都市近郊なので、人口も減っていないし、地域の問題といってもそれほど深刻なもはないのではないかと思っていた。しかし、相談会で話を聞いてみると「私は後継ぎなのだが農業をしていないので、両親が農業を辞めたら農地がどうなってしまうかわからない。」という話から、「みかんをつくっていたが、景気が悪くなって止めてしまったので、山が竹・葛だらけ。」や、「先週、人手が足りずに区の婦人会が解散した。」など、切実な問題がぼろぼろと出てくる。しかし、これだけ問題が山積しているのに、どこか他人事のように語っているような違和感を感じた。もしかしたら地域の一番の問題は、地元の人の関心のなさ、危機感のなさではないかと思った。

竹でつくった器や箸でイノシシ鍋をいただく

●第３回は食材もお皿も糸島仕様でおもてなししてくれた稲留の地域づくりグループ

第２回では、地域の問題を解決するために行動を起こさないのなら、会を続けても仕方がないのではないか、という話まで出ていたのだが、稲留の人から「山に増えた竹を切り出して、竹炭をつくったりしているので、その見学会をかねて一緒に作業したり、イノシシ鍋を囲みませんか。」という提案があり、３回目は稲留の火山（ひやま：地名）で行うことになった。

稲留地区では、数年前に行った地域づくりのワークショップがきっかけとなって、稲留のシンボル的な山である火山に生い茂って管理されていない竹を町外の人も協力して切り出したり、竹炭にしたりといった活動を行っている。

当日はあいにくの雨模様だったが、25名ほどの人が集まって、竹を切り出しては、イノシシ鍋の薪に使ったり、お皿や割り箸をつくったりしていた。そば打ちをしている人もいたが、そのそば粉は桜井でとれたものを朝に挽いてきたものである。メンバーには農家の人もいるので、野菜やイノシシも糸島産である。それぞれ何か一品持ち寄ろうといっていたので、地鶏のおにぎりや“ぬかご（むかご）”まであった。

竹は油分が多いので、切りだしたばかりでもすぐに燃える

使い終わった竹の食器は間伐した竹といっしょに燃やしてしまえばいいので、後かたづけが非常に楽だった。

●地元のおばちゃんたちが宅配まで始めている芥屋地区の地域づくりグループ

第１回と２回と違って３回目の参加者には女性が多く参加していた。会の参加者が、地域づくりに実際に取り組んでいる人たちに声をかけてくれていた。７名いた女性のうち５名が芥屋の地域づくりグループの人達だったので、どんなことをしているのか紹介してもらうと、さつまいもや里芋の宅配セットをつくって都会に住んでる人60戸ぐらいに配送したり、海岸の清掃をしたりしているそうだ。宅配セットの中身にはおいもだけでなく、芥屋でとれるニンジンを煎って玄米と合わせて玄米ニンジン茶という新商品までつくって入れていたりしている。

「今日は自分たちの地域づくりに役立つネタを探しにきました。」とはっきりした目的を持って相談会に参加していて、稲留の竹炭をみて宅配に入れるための交渉をはじめ、どんなパッケージにしようかと相談まで始めていた。

そんな様子を見ていた桜井の地域づくりグループの人達は、桜の植樹やお芝居などの取り組みがだんだん尻窄みになる中、もっと自分たちでできることを考えようと影響を受けていた。

馬場地区の人も、各地区がいろんな取り組みをしていることを知らなかったので、馬場でも地域づくりにもっと取り組もうと、田園居住を実現できないか動き始めている。

●相談会が地区を超えた住民のネットワークになりつつある

地域ごとにいろんな取り組みをしている人はいても、その人たち同士の交流の場はこれまでなかったらしく、相談会がその役割を果たし始めているようである。毎回誰かが新しく地域の人を連れてきてくれているので、新しい問題を発見したり、地域で共通する悩みなど知ることができる。

稲留地区や芥屋地区の取り組みを知って、桜井地区や馬場地区の人が影響を受けたりと、地域の取り組みの発表の場、地域づくりのヒントを探す場にもなっているようである。

まともな事務局や参加者の名簿もなく、２ヶ月に一回の開催日が近づくと、それぞれの地区で声を掛け合ってもらって集まるといういいかげんな会なのだが、いろんな地区のグループが相談を持ち寄る雰囲気ができつつあるように思う。私自身はまだ糸島に住んでいないので、やじうまの身分なのだが、田園居住などのプロジェクトを通じて少しでも多くの地元の人とのネットワークを作れたらいいなと考えている。第４回の相談会は２月に芥屋の地域づくりグループと朝８時ごろから海岸のゴミ拾いから始める予定である。今度はどんな人が参加するのか楽しみである。

（ほんだ　まさあき）

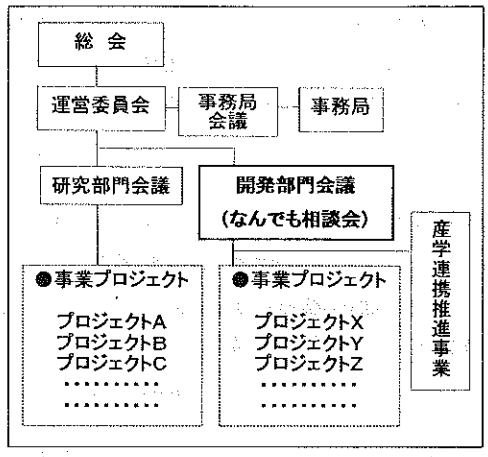
「なんでも相談会」からはじまる久留米大学産学連携の事業プロジェクト立ち上げ

～久留米なんでも相談会よもやま話～

●「何かやりたい」という思いのある人たちとの準備会から始める

当初、久留米大学研究開発コンシーアムの仕掛け人である駄田井先生から、「久留米地域と久留米大学とをつなぐ事業プロジェクト部門を立ち上げたいので、何か知恵がないだろうか」との相談があった。コンソーシアムとは「何か集まってコトおこしを行う連合体」ということらしい。研究部門の方は大学内の研究者が、従来どうりに興味のあるテーマに沿った研究をすればよいのであるから、わかりやすい。しかし、開発部門というのが、いまいちイメージとしてわかりにくいものであった。

そこで「協同組合　地域づくり九州」の有志などと話し合った結果、先ず地域からのニーズを基に地域の人たちと一緒に考え、解決していくこと



久留米大学地域研究開発コンソーシアム(仮称)のイメージと「なんでも相談会」の位置づけ

を狙いとした「なんでも相談会」から始めてはどうかということとなった。準備会は、この事業趣旨に賛同する久留米・筑後地域の人たちとフリーに話し合うことからスタートした。昨年の9月12日に第1回目の準備会があり、大学関係者、久留米・筑後地域の有志、協同組合地域づくり九州の有志らが約20数名が集まり、この事業の趣旨や「何かやりたいこと」をそれぞれ自由に発表した。その後、各自“思い”のある人が、それぞれ企画したプロジェクトを持ち寄り、2回の準備会を行い、中間発表会の運びとなった。

●中間発表会には大学関係者約50数名が参加

当社でも、久留米市や筑後地域に居住している関係者に直接案内状を送付したものの、正直言って、当日何人集まるのであろうかと不安であった。

しかし、11月末の中間発表会には、当初目論んでいた概ね50名が参加し、駄田井先生の進行で会が始まった。発表会では、原田経済学部長のあいさつのあと、特に発表する人に事前に頼んでいたという訳ではなく、駄田井先生に指名された各プロジェクトのリーダーの方が、今後、やりたいと思うプロジェクトを披露した。

「この指と～まれ」方式で数名の方が集まったプロジェクトは、下記のとおりである。

○薬物依存問題解決
薬物（シンナー、覚せい剤、麻薬、アルコール）依存者は、今のところ病院か刑務所に収容される以外にない、通常の生活空間で薬物依存から脱却する方法を模索する。

○大川家具のねっとわーく販売
人のつながりの中で、互いに信頼を築きながら優良な家具を販売するネットワークをつくる。修理や下取りについても責任を持つ。このネットワークは他の物品（特に地場産品）の販売に役立つ。

○久留米大学海外交流ネットワーク
久留米大学には多くの留学生が在籍し、また卒業して多方面で活躍する人材も多い。彼らが持っている情報と人的つながりをネットワークする。筑後流域の企業が海外に進出する場合や現地の生きた情報を得るのに役立つ。

○筑後川流域の人工林保全プロジェクト
筑後川流域の森林保全をCO2削減取引件の対象にして、森林保全の費用を獲得する。

○現代若衆宿
遊び・学び・仕事の一体化があって、人は努力し能力が開発される。それで、例えば職場を単に職場体験の場と考えるのではなく、積極的に教育の場として捕らえる、あるいは祭りやイベントの実行を通じて能力を高める。

○シニア世代の情報社会への参画と能力開花に向けた支援事業
遠くにいても簡単に長時間、様々な人々とコミュニケーションがとれ、さらにどこからも情報が発信できるインターネットの特質は、高齢者に非常に有益である。パソコンを活用した高齢者の方々の情報社会への参画を支援し、地域社会における交流・貢献を手助ける。

また、発表会の当日には「何かやりたいこと」「参加したいプトジェクト」などのアンケートをとった。この「何かやりたいこと」の中では、①「子ども達の夢」を語りながら地域に子どもが残る仕組み、②現在、久留米市で取り組んでいる久留米リサーチパーク、久留米ビジネスプラザを中心としたベンチャー支援、③老人世帯に向けた修理や後片づけなどの「何でも屋」、④堀の生態系に配慮しつつ地域住民で管理する水辺のあり方研究、堀の学習や実践活動のサポート、観光資源化

久留米大

地元市民事業協定

まちおこし団体設立

地域連携に活路

少子化、不況で競争激化

「存在」をアピール

現代論点

西日本新聞の記事 03.12.7

の構想づくりなどをトータルに考える「筑後堀活性化センター」を設置したいなど、ユニークで面白い意見もあげられている。

●ニーズから生まれた「現代若衆宿」プロジェクト

昨年、ＮＩＲＡの委託研究で「個族化社会のネットワークの形成」というテーマで、個族化社会の実態や問題、今後の対策などを研究した。この中のネットワークしやすくするための仕組みのひとつとして「現代若衆宿」というものを提言している。これは①現在の高校生や大学生が、何のために学校に来ているのか、わからなくなっていること、②これまで強固であった地縁・血縁関係や社会的なつながりが弱くなっているということから“つながり”ができにくくなっている。そこで、在学期間中に「学生が自分が本当に何をやりたいのか、仕事とはどんなものなのか」を現場で感じるようなシステムを大学のカリュキュラムの中に組み込めないかという提言であった。一方、久留米市で飲食業（ファイン・フーズ・サービス）を営んでいる白仁田社長さんのところでは、学生アルバイトを単に労働力として雇うのではなく、人材育成としてきっちり躾や仕事というものが何であるのかを教えているらしく、ここでアルバイトした学生は、就職試験で３社～５社に受かるらしい。つまり就職合格率300～500％ということである。白仁田さんは、ご自身も仕事の現場で起業家を育てたいという思いがあったことから、「現代若衆宿」というコンセプトにいたく感じ入ったことが、今回のプロジェクト立ち上げに結びついたのである。このプロジェクトを実現化するためには、久留米市内だけではなく、広く受け入れてくる企業に呼びかけていかなければならない。

プロジェクトは、この他にも「筑後川を楽しむ会」「都市の農村の縁組」「地域づくり活動資金支援プロジェクト」「ことづけモノ配送システム」「地域通貨の利用促進」「ネコメ洞（空き店舗利用街角交流所）」「売るために自分の言葉を作ろう〈わかりやすい提案書〉作成支援」などもあがっている。

今後、この中から事業化につながり、継続的にできるものがどの程度になるか知れないが、チャレンジしないことには何も始まらない。イチローでも３割しか当たらないのであるから、このうち３割でも事業化できれば大成功であろうと思う。興味のあるプロジェクトがあり、一緒に参加したいと思われた方は当社までご連絡ください。各プロジェクトのリーダーの方を紹介いたします。

（やまだ　たつお）

高齢者はどこを終の住処とするのだろうか５

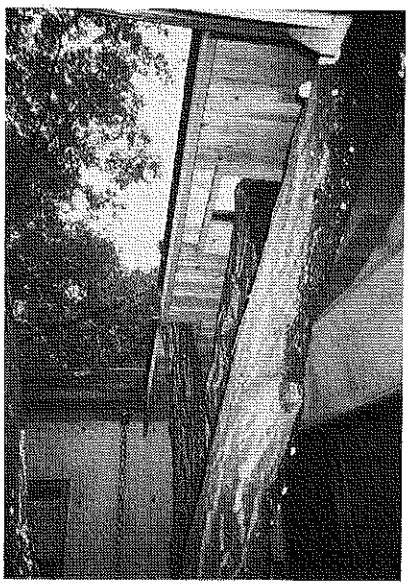
ＯＬ、ファミリー、高齢者など多様な人々が住み、集う普通の暮らしがある「」ケアハウス：ゴジカラ村」と「ぼちぼち長屋」

山田　龍雄　愛甲　美帆

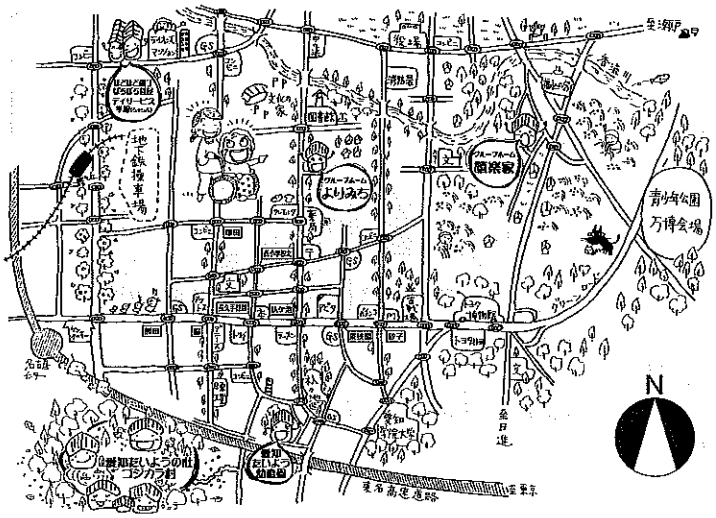
「愛知たいようの杜」は名古屋市の東側に隣接する長久手町の郊外部に位置している。「ケアハウス：ゴジカラ村」や「ぼちぼち長屋」の建設に大きく係わったのが「愛知たいようの杜」の施設長である吉田一平さんである。

昨年の11月に10年ぶりに吉田さんとお会いすることができた。最初に尋ねたときには、雑木林の中に幼稚園、特別養護老人ホーム、介護福祉士専門学校があり、特別養護老人ホームへは木立の中の砂利道を歩いていった覚えがある。現在、「愛知たいようの杜」の前では土地区画整理事業が実施されており、かなり周辺の風景も様変わりしていたが、「たいようの杜」だけが小高い雑木林の中に佇んでいた。

また、この10年の間に、介護保険事業が始まり、社会福祉法人「愛知たいようの杜」ではその後に関係する仲間たちとＮＰＯ法人を組織されるなどで、いろいろな事業を展開していらっしゃる。
今では「愛知たいようの杜」を中心に、ネットワーク型で地域に密着した福祉施設を運営している。



木立を切り取らないようにしたケアハウスの屋根



●愛知たいようの杜が係わる施設
（社会福祉法人：愛知たいようの杜）
○特別養護老人ホーム
○ショートステイ
○ケアハウス「ゴジカラ村」
○ヘルパーステーション「ひだまり」
○訪問看護ステーション「ふれあい」
○デイサービス「ゴジカラ村」
○デイサービス「平庵」（ちゃらん）
○グループホーム「嬉楽屋」
○グループホーム「よりみち」
（ＮＰＯ法人での運営）
○ぽちぽち長屋
（デイサービス「平庵」と併設している）

愛知たいようの杜関連施設

●福祉は普通の暮らしという話と誰もが立ち寄りやすいケアハウス

10年前にお話をした時にも一貫して言われていたようであるが、吉田さんは「福祉は普通の暮らし」であるという明確なコンセプトを持っておられる。

10年前は、特別養護老人ホームをオープンして数年後であったと思うが、この時、ここでは痴呆と痴呆でない人を分けておらず、みんな一緒に過ごされていた。小生は、当時の施設計画の発想としては痴呆と痴呆でない人を分けるのは当たり前という先入観があったが、同行したＩ氏が「何で痴呆の人を分けてないのですか」と聞いたとき、吉田さんからは「どの人が痴呆で、そうでないのかわかりますか」という答えが返ってきた。そして、10年経った今でも痴呆とそうでない人を区別していない。そして17年間悩み続けられている。

吉田さんは「痴呆とそうでない人を分けると管理しやすくはなるが、それはそれで悩みもある」と言われ、さらに「高齢者の施設の入居者は『時間に追われない国』、施設側は管理という立場になると『時間に追われる国』なのであり、相反する世界なのである。両側の折り合いを付けるのが難しいのは、当たり前である。また、高齢者だけの世界は普通の暮らしではなく、いろいろな人が交わることが『暮らし』なのであり、いろんな人が入ってくるとわずらわしさも出てくるのは当たり前なのだ。暮らしとは、そういうものである」というようなことを言われていた。特別養護老人ホームもケアハウスも厚生労働省の分類では福祉施設ではあるが、吉田さんは、施設でなく、いかに高齢者にとっての普通の「居場所」、「暮らしの場」を提供するかに重きをおいておられる。

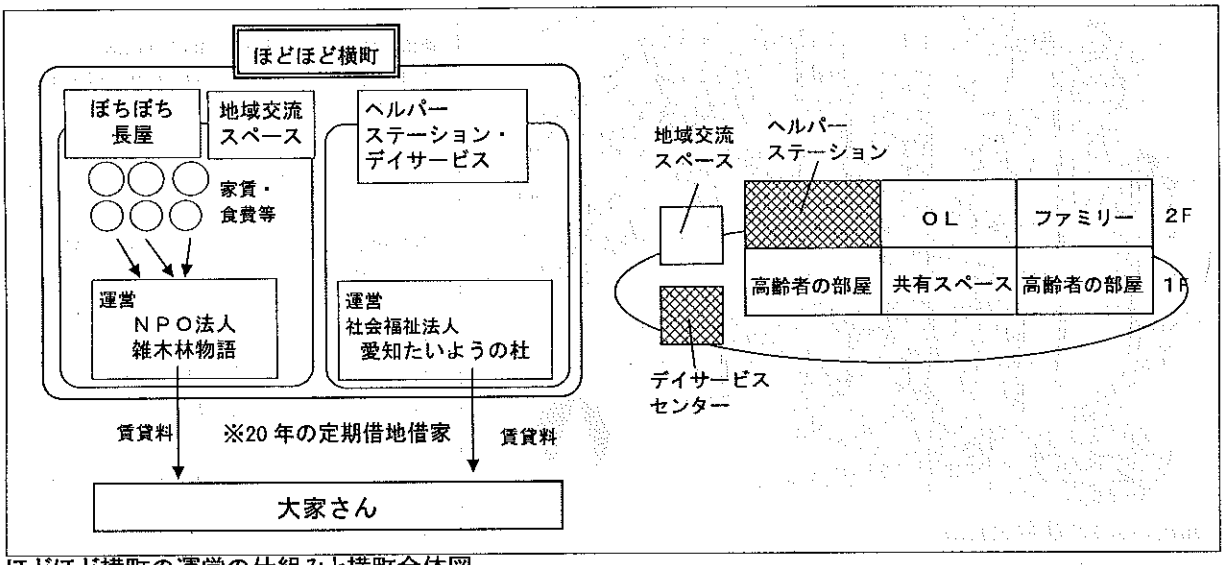
新しくできた「ケアハウス：ゴジカラ村」では、玄関に入ると、ホールを兼ねた喫茶店兼たまり場があり、２階にあがると誰もが利用できる食堂があった。

このケアハウスでは、どこからも入りやすい建物となっている。管理する立場からは管理しにくい建物となるのであるが、ここでは誰もがふらっと立ち寄れるような普通の暮らしを実現するため、どこからでも入れる建物となっているのである。

ケアハウスは４階建てになっているのであるが、雑木林の木立をできるだけ伐採しないよう、また、廊下のようになってしまうのを避けるため、部屋を３つ以上並べないようにしており、かなりデコボコの建物となっている。また、屋根も木立を切り取らないため、枝に合わせて屋根もデコボコとなっているのは、まさに吉田さん流の自然とも、“ほどほどにつきあう”といった発想が感じられる。

●「ぽちぽち長屋」とは？

「ぽちぽち長屋」は、介護が必要な高齢者や障害者（介護保険対象）の方と会社員の女性や子どものいる家族とともに暮らす介護利用型アパートで、地下鉄の駅に徒歩10分という立地にある。ここには長屋だけでなく、愛知たいようの杜のデイサービスセンター「平庵（ちゃらん）」、ヘルパーステーションや地域交流スペースが併設されており、この全体を「ほどほど横町」と名付けている。「福祉は暮らし」の考えのもと施設を運営されてきた吉田さんであるが、「同じ層の人が集まる施設では限



ほどほど横町の運営の仕組みと横町全体図

界がある。小さな規模でいろんな人がごちゃまぜに住み、誰かから必要とされる仕組みが必要ではないか」ということで創られた。仲間とＮＰＯ法人雑木林物語を設立。これが運営主体となり、理事の１人でもある大家さんが建物と土地を用意し、借地借家方式で運営されている。

●いろんな人がいる長屋のぬくもり

入居者は、介護度３、４、５の方13人、会社員の女性４人、子どもがいる家族が１世帯である。長屋は、木造の２階建てで玄関は１つ。１階部分は高齢者の居室と共用スペース（トイレ、浴室（介護用風呂、露天風呂）、リビング）で、つながっているが、２階部分は「ヘルパーステーション」「会社員の女性の居室」「家族世帯の居室」と３つに分かれており、２階からも１階の様子が伺えるような作りとなっている。

高齢者の入居条件は右上の通り。常駐のヘルパーが１人いる。個別にも、隣接しているヘルパーステーションからヘルパーが派遣されるなど介護度に応じて在宅サービスを受けられる。

お話を聞くまで、元気な高齢者が対象だろうと思っていたが、実際は介護度の高い人が入居されている。これを作られた背景には、施設の入所待ちをしている要介護度３、４、５の方をどうするかということもあったそうだ。女性の会社員の入居者は新聞で公募したところ30人の応募があり、面接をされた。家賃は通常月額６万円だが、“チャボまし料”を差し引いて３万円となっている。“チャボまし”とは、チャボよりましという意味だそうで、以前特別養護老人ホームで飼っていて

入居の条件

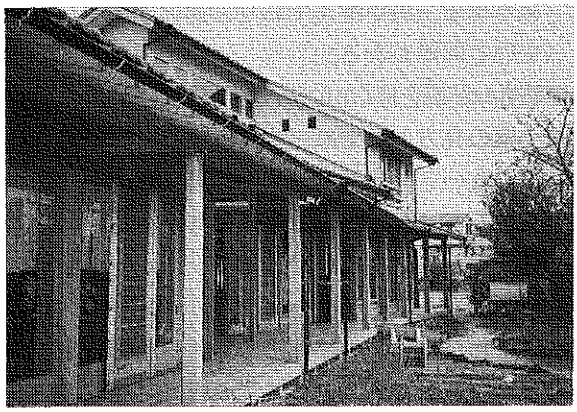
○介護保険の認定を受けている方
○介護度２以上の方（原則介護度３以上）
○痴呆でないかもしくは軽度で問題行動などのない方
○居住地、障害種別などは問いません。

料金表

○敷　金：15.5万円
○礼　金：15.5万円
○家　賃：6.5万円／月
○運営費：５万円／月
○食　費：４万円／月
○介護サービス利用料
　※介護度別およそ１割負担分
○日用品費・電話通話料・新聞等
○ＮＰＯ入会金：５千円

お年寄りの心をなごませていたチャボ以上に話をしたり、いざというときに助けることもできるから割引なのだそうだ。だからといって、食事を一緒にするなど強制したり、無理に合わせるということはない。女性は働いているし、居室には浴室、トイレ、ミニキッチンがついているので食事は各自でとったり、時には一緒に食べたりと自由である。

長屋には、池がある庭に面して広い縁側もあり、のんびりくつろげる暖かい雰囲気である。伺った日は、廊下に車椅子を並べてデイサービスの人の出入りを眺めながらお話をしてあったり、リビングではヘルパーさんの子どもさんと長屋に住んでいる子どもさんが走り回っている横で、大人がおしゃべりをしていたりと、家の中でそれぞれが思うように過ごしているのだけど、どこかでなにげなく見守られているようなそんな雰囲気であった。「わずらわしいかもしれないけど、いろんな人がほどほど適当につきあいながら、支え合い、笑っ



庭に面した広い縁側がついているぼちぼち長屋

て暮らしていけたら」という吉田さんの思いが伝わってくる場所だった。

●地域密着型の小規模施設が必要な時代

2000年（団塊の世代50～55歳）における65歳以上の高齢者数は約2,227万人であったが、団塊の世代がほぼ65歳以上となる2015年の高齢者数は約3,333万人になると予測されている。あと10年と少しで総人口の30%近くが高齢者となる時代が来る。また、厚生労働省が発表した予測では、2015年には痴呆性高齢者が100万人増えて250万人となるとも予測されている。その後、高齢者人口は減少していくものの、総人口が減少していくため、高齢化率はさらに上昇していく時代となる。

このような超高齢化・少子化時代、また、「子どもの世話になりたくない」といったニーズも高くなってきていること、さらに共働き世代などが増えることを考えると、当然、高齢者向けの施設需要は、さらに高まっていくと予想される。

しかしながら、現在の介護保険財政の中で大規模な施設を建設していくことは、益々困難になっていくことは目に見えている。

現在、運営形態や財政的な支援などのイメージは固まっていないものの、厚生労働省から盛んに言われているのが「小規模多機能型の施設」である。

現在、小規模福祉施設のひとつである９人以下の痴呆性の高齢者の面倒をみる「グループホーム」が全国に設置されている。しかし、この施設は、①経営が成り立つ９人ぎりぎりの定員で運営している施設が多いため、１人でも欠けると経営的に難しいこと、②高齢者だけの施設であるため、吉田さんの言う「普通の暮らし」という点では欠けていること、③社会福祉法人が設立すると一般銀行からの借り入れができないこと、などの問題がある。

そこで、吉田さんが、新たに取り組まれたのが、国の補助制度などをあてにせず、一般の人と高齢者とを一緒に住まわせ、いろいろな人が交わる施設であった。　「ぼちぼち横町」は、「小規模多機能型施設」の先駆けであると言えよう。

吉田さんは、ニーズと自分の理念を実現化するために作っただけであり、小規模多機能型施設などといった概念にはとらわれてないものと思う。

これからは、このように各地域で“思い”のある人が、地域ケアのバックアップを受けながら、本当に地域のニーズに応じた多様な小規模施設を建てていくことが望まれると思う。

（やまだ　たつお、あいこう　みほ）

第74回　地域ゼミ

地域にあった自然林の再生

伊藤　聡

●竹林が膨大に増えている

山をみて気付いている人は気付いていると思うが、福岡の山は竹林がどんどん広がって、雑木林や杉林を減らしている。車で何年も同じ風景を眺めているところでも、山裾の方から年々竹林が上っていくのが分かる。

そんな問題も含めて、地域にあった自然林の再生とは何かについて、「森林再生支援センター」理事の高田研一先生に講義していただいた。

高田先生は、大学での研究を経て、良い緑、質の高い緑とは何かについて取り組むため、「自然配植技術協会」と「森林再生支援センター」を５年ほど前から始めている。「自然配植技術協会」は地域の専門家のネットワークをつくるため、「森林再生支援センター」は調査研究や事業・設計なども行う研究者専門家の組織として作ったということだ。

以下、ゼミで話された内容を紹介する。

●木を植える技術が日本にはなくなっている

・森林の再生については、運動論としては大体出尽くしているので、生態などの技術論を中心に取り組んでいる。

・最近、大きな問題となっているのは、静岡以西

のモウソウ竹の膨大な拡大、北日本ではシカの害などがある。特に福岡の竹林はひどい状態。

・地域らしい景観を残していくことが、地域が生き残っていくひとつの大きな柱である。

・競争入札、電子入札が進み、仕事は金だけが問題になって質は粗悪になっている。その結果、良心的な業者が疲弊し、職を失ってきている。

・木を植える現場において、若い人の方が体力があり仕事の量が多いため、40歳の経験20年の技術者が20代の若者にバカにされている。技術がおとしめられてきたため、経験を積んだ人に学ぶような技術がなくなっている。

・京都では、観光客は秋に紅葉を見に来るにも関わらず、葉が青いうちに枝を切っている。落ち葉の掃除が大変だというクレームが市民から来るからだ。

●現場のポテンシャルをみる技術者が必要

・戦後の造園技術は間違っていた。治山技術の中で、崩れにくい山にするために木を植える、ということができなかった。それは知識がなかったためで、木を植えると危ないとさえ言われていた。

・今までの土木技術は、水を「集めて捨てる」発想しかなかった。そして現場のポテンシャルを無視して全国を一色に塗りつぶしていった。全国に金をばらまくには、技術を画一的にする必要があったからだ。現場のポテンシャルをみるには専門家が必要になる。

●日本の原生林は残り少ない

・日本の森の見方には、原生林、林業の森、農業・薪炭用の森、破壊された森、新しく作り出された森の５つがある。

・日本の原生林は、崖地くらいしかない。原生林のほとんどは昭和40年代には国の政策で切られてしまった。残った原生林もシカにやられている。

・林業の森は、子や孫に継がせるためではなく、自分の儲けのために補助金を使って木を植えた。そこには都市との賃金格差の問題があったため、国策として奨められた面がある。

・森林再生のための市民ボランティアは、広めるためにはいいが、継続的にその地域の責任を持つ人たちではないと考えていた方がよい。

・新しい森では、同じ木から種を取って全国に広める母樹主義が進んでおり、遺伝子が単純化している問題がある。

●坊さんが庭を掃くからシャクナゲが育つ

・土壌の見方としては、これまでは良い土か悪い土かという発想で、保水性、通気性、養分といった話だけだった。微生物の方からみると、鉱物と水から微生物が発達する「合成型土壌」、それが進んで肥沃な土になる「発酵型土壌」、微生物が発達せず酸性になる「浄菌型土壌」などがあり、これによって育つ樹木が違ってくる。

・養分があるところに樹木が生えるとは限らない。松やツツジ、シャクナゲなどは栄養があると微生物にやられてしまう。お寺にシャクナゲがあるのは、坊さんが庭を掃いて発酵しない酸性型土壌にしているからだ。

・森に対する基本的制約は、地質、気候、地史、人為の４つがある。これを踏まえて地域固有、地域らしさとは何かを考える必要がある。

・もみじは通気性の良い土を好むので、石ころや石垣等で植えるのがいいのだが、それができない場所では、日本人の古くからの造園技術では粘土を敷いてその上に根をはわせた。こういったものこそ文化だ。

●日本人の発想は森に包まれることであって、彼我の区別をすることではない

・日本人は自然に包まれる発想で生きてきた。自分自身が自然の構成要素だった。その中に彼我の区別をつける要素還元論を持ち込んで造園をやっているからうまくいかない。

・現場に行かない設計者の図面を、現場で融通を利かせることが保証されていない。分業の中で、責任の所在ということの方が重視されている。

・樹木は一律な植え方ではなく、疎密を考えて植えなければならない。今は自然配植の技術が進み、ランダムな集中配植で植えている。

・地域が食べていけるようにする中で、プロが食べていける仕組みを作りたい。

●福岡でも支部の準備が進む

私も、数年前から山の雑木林が竹林に駆逐されていっていることが気になっていた。一方で、地中の炭素を空気中に吐き出しながら生活していることに対する懺悔のような気持ちもあったが、空気中の二酸化炭素は炭素として固定しておくのがいい、という話を聞いたことがあった。そんなこ

とからこれまで何度か炭焼きをやったことがあり、竹炭も何度か焼いた。最初自分たちでやってみた結果は、生焼けだったり灰になったりと散々だったのだが（よかネットNo33で報告）。

竹炭を焼いて、水の浄化などに使った後の最終処分をどうするかは悩んでいた。焼いて二酸化炭素を放出しては元も子もないし。そのことを高田先生に尋ねると、炭はパウダー化してコロイド材にしたり、畑などにまくといい、という話だった。

内容の濃い話で、高田先生も１年間シリーズで話さないと伝わらない、と言われていたが、自然をどう見るべきかということについては、かなり奥が深そうだと感じた。

土木や造園に関わる人、山を持っている人などはもちろん、一市民としても聞いておくべき話だろう。技術面を意識しなければ、森や自然を作るつもりが破壊してしまうということが、今後もまかり通る。

福岡でも、高田先生に賛同する数名のメンバーが「森林再生支援センター」の支部としてＮＰＯを立ち上げようと勉強を進めているので応援したい。　（いとう　さとし）

個族化社会のネットワーク形成②
個族化社会で“起きてしまっている未来”？
いや、1980年頃から始めていた過去の遺産？
糸乗　貞喜、本田　正明

「個族」というテーマは、考えたりデータ整理に取り組んだりするにしたがって、過去にさかのぼり思いもしなかった問題をつきつけてきた。個族の反面は核家族であることはわかっていたが、これほどまでに核家族が減少しているとは思わなかった。核家族は1980年ごろから減少し始めている。そのことをまとめて本号の表紙のグラフとしておいた。

私たちは、地域づくり計画のお手伝いをするコンサルタントであり、日頃から「人口問題」だけを意識して仕事をしているわけではない。たまたま、人口が地域計画の最大の要素であり、日頃から過密型の地域や過疎型の地域に出入りしていることによって、地域ごとの人口構成を気にしやすい立場にいるというだけのことであった。したがって、研究会の活動当初は個族という意味の整理もできていなかった。

「個族は高齢者問題ではないのか」、「子どもが減っているということではないのか」、「夫に先立たれた女性のことではないか」などといった議論が出ていた。はじめから青壮年問題（30～54歳）として意識していたわけではない。また、「個族などというものは、社会的によくない態度の人間のことだから否定すべき存在として取り上げるべきではないか」などといった忠告をいただいたりもした。

データ整理に取りかかり、それをもとに討論を重ねていくにしたがって、「青壮年の個族化」に収斂していった。もちろんその中から核家族という言葉でひとつにくくれない核家族の実態にも気が付いたのである。そういう過程を経て次の三つのグループを定義することになった。

①青壮年のひとり暮らし個族
②青壮年の隠れた個族＝世帯内未婚者
③若い核家族＝生産年齢（世帯主54歳以下）の核家族

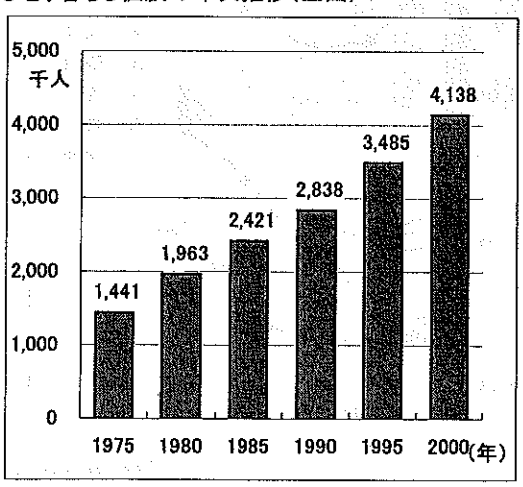
この三つのグループは①・②と③は対偶の関係にある。そしてこれらの①・②・③の結果が「少子高齢化」ということになる。

これらのプロセスを整理したデータをお届けする。

①ひとり暮らし個族の増加
＜ひとり暮らし個族が25年間で約3倍に＞

・1975年から2000年までの25年間で青壮年人口は漸減傾向にあるが、ひとり暮らし個族は1,441千人から4,138千人へ増加している。

ひとり暮らし個族の年次推移（全国）



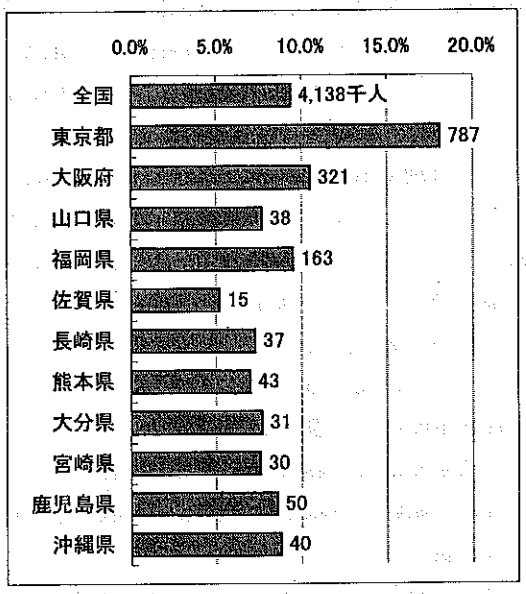
資料：国勢調査

＜ひとり暮らし個族は都市部に集中している＞

・個族率を都府県別にみると、東京、大阪、福岡となどの都市部で高くなっている。

・男女別にみると、男性の個族率が高くなっている。

地方別にみたひとり暮らし個族率
（2000年、青壮年人口比）



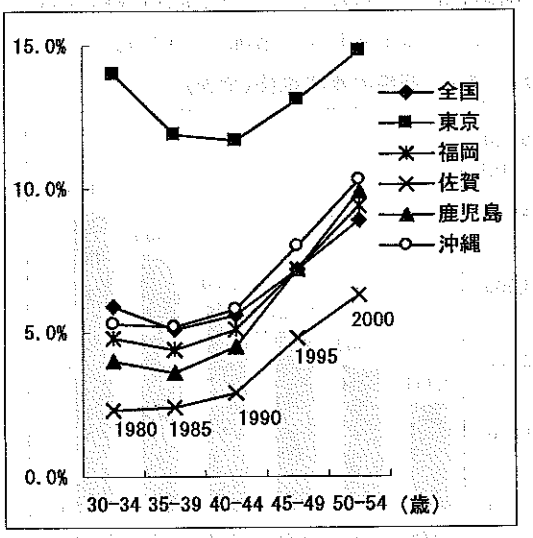
資料：国勢調査

＜ひとり暮らし個族率は35～39歳を境に増加へ＞

・ベビーブーム世代（以下BB世代）のひとり暮らし個族率（コーホート推移）は、どの都府県でも35～39歳を境に増加に転じている。

・若い世代はさらに分岐点の個族率が高く

BB世代のひとり暮らし個族率コーホート推移



資料：国勢調査

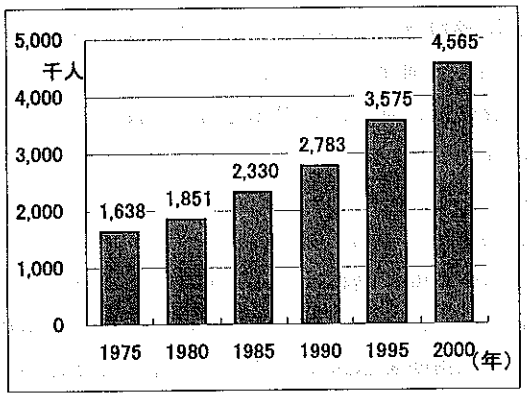
②世帯内未婚者の増加

＜隠れた個族も25年間で3倍に増えている＞

隠れた個族の年次推移＞

・1975年から2000年までの25年間で青壮年人口は漸減傾向にあるが、隠れた個族も同様に1,638千人から4,565千人へ増加している。

世帯内未婚者の年次推移（全国）



資料：国勢調査

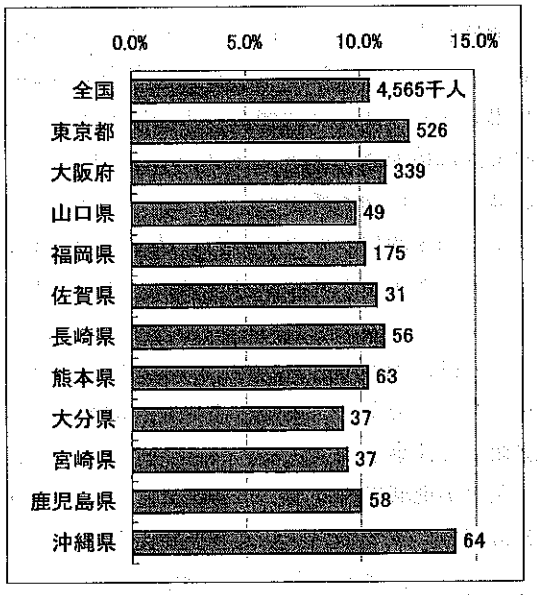
＜隠れた個族は地方に多くなっている＞

・ひとり暮らし個族では、都市部に集中する傾向がみられたのに対し、隠れた個族は地方で高くなっている。

・特に沖縄県で高くなっている。

・男女別にみると、男性の隠れた個族の方が多いのだが、女性の割合がひとり暮らし個族よりも高くなっている。

地方別にみた隠れた個族率
（2000年、青壮年人口比）



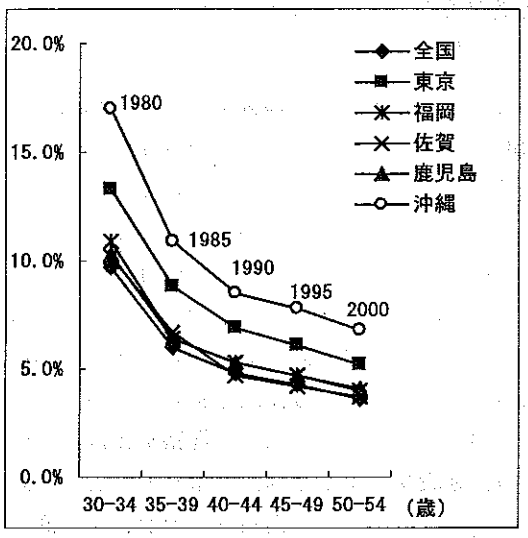
資料：国勢調査

＜30代以降は隠れた個族も減りにくく、固定化が進んでいる＞

・BB世代の隠れた個族率（コーホート推移）は、どの都府県でも30～34歳から35～39歳になるときは5パーセント以上減少しているが、40歳以降はあまり減っていない。

・若い世代はさらに隠れた個族率が高くなっており、隠れた個族のままでいる人が増え、固定化が始まっている。

BB世代の隠れた個族率コーホート推移



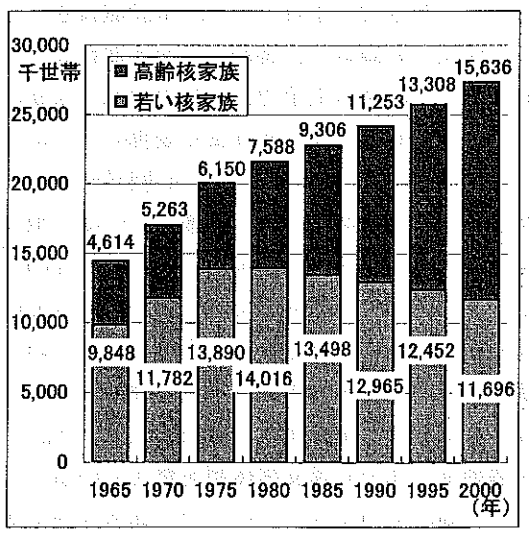
資料：国勢調査

③若い核家族（世帯主が54歳以下）の減少

＜若い核家族の減少は1980年ごろから＞

・典型的な核家族（夫婦が協力して子どもを育てる）は、1980年から2000年の間に、16,557千世帯から15,289千世帯と減少を始めている。

核家族世帯の年次推移（全国）



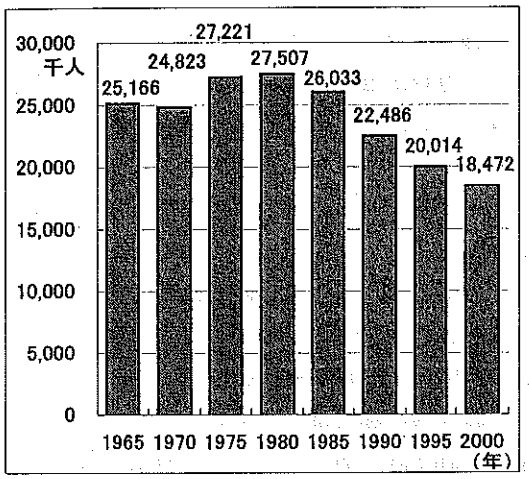
資料：国勢調査

④①～③の結果としての少子高齢化

＜15歳以下人口も1980年から減少している＞

・15歳以下人口は1980年から2000年までに、27,507千人から18,472千人と３割以上減少している。

15歳以下人口の年次推移（全国）

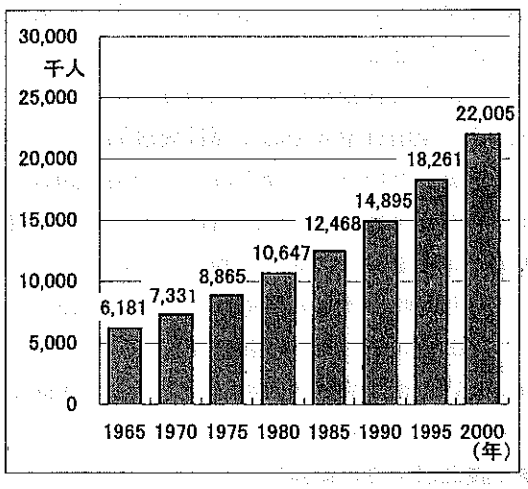


資料：国勢調査

＜65歳以上人口は35年間で3.6倍に＞

・65歳以上の人口は、一貫して増え続けており、1980年から2000年までの20年間をみただけでも、10,647千人から22,005千人へと２倍以上に増えている。

65歳以上人口の年次推移（全国）



資料：国勢調査

これからBB世代も高齢者になる中、個族化はどうなっていくのだろうか。

このリポートをご覧になって、何かを感じていただいた方は、是非ご意見を寄せていただきたい。もちろん反論も歓迎です。

(FAX　092-731-7673)

（いとのり　さだよし、ほんだ　まさあき）

やごろう苑見学報告

～熱心な家族会運営やリハビリで家庭復帰率アップを目指す～

山田　龍雄

介護保険導入後、①要介護認定を受けた人のサービス選択が自由にできるようになったこと、②措置時代の所得に応じた利用料から原則一律１割負担となったことで中高所得者の負担が減ったことなどから施設入居希望者が急増し、施設待機者が増えている。全国ベースでみると介護保険導入前の 1998 年に厚生省が調べた数の５倍近くあるらしく、約 23 万人が待機しているという。（平成 15 年２月：朝日新聞記事）

介護保険の趣旨は、在宅介護化を進める目的で始められた訳であるが、現在、施設入居者は要介護認定者の約３割しかいないのに、介護費用全体の６割～７割近くが施設費用となっているという矛盾が生じている。

今後の高齢者介護においては、①地域の協力をもとに地域での介護力をどう高めていくのか②運営経費が少なくてすむ小規模施設などをどのようにつくっていくのか　③施設だけではなく無駄のない在宅のケアプランの取り組みなどが重要になってきているといえよう。

このような背景から介護保険費用の適正化を図るために全国自治体や老人福祉施設協議会（以下「老施協」という。）などは、その実態調査や計画づくりを実施している。当社でも、この介護保険費適正化事業の調査・計画づくりの一部を手伝っており、昨年の11月に福岡市老施協関係のメンバー 40 数人の方々と一緒に在宅化に熱心に取り組んでいる鹿児島県大隅町にある「老人保健施設やごうろう苑」を視察してきた。

●介護芝居付きの研修ツアー

「やごろう苑」は老人保健施設であり、そのユニークな取り組みのひとつが介護ツアーである。「やごろう苑」の事業母体は隣接地で経営している昭南病院であり、平成 3 年 9 月にオープンし、開設後すでに 12 年が経過している。

ちなみに「やごろう」とは、大隅地方の伝説の偉人で大男であった弥五郎どん（６代の天皇に仕えた武内宿弥がモデル、あるいは隼人族の首領と

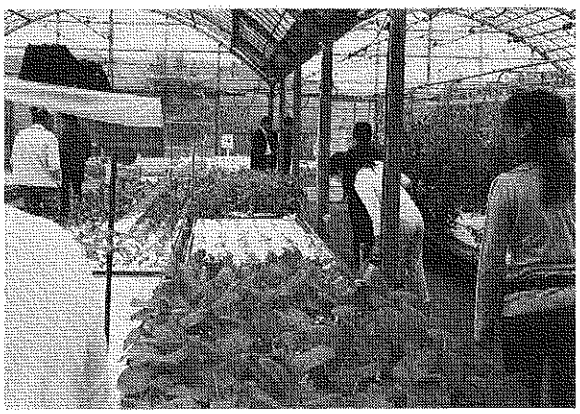
職員が演じる介護劇「甚平さんが呆けた」のワンシーン（パンフレットより）

の言い伝えがある）の通称であり、大隅地方の伝統的な祭りにもなっている。その後、平成 8 年２月にはグループホーム「あがいやんせ（おあがりください）」、平成11年９月「おじゃったもんせ（いらっしゃいませ）」の 2 箇所がオープンしている。また、ケアステーション（在宅介護支援センター）を 3 箇所設置しており、大隅地域全体をカバーした介護体制を整えている。

介護ツアーでは、全国から視察が相次いでいるため、施設見学を不定期に実施していると施設運営にも差し障ること、視察者へのサービス低下にもつながるとのことから、「やごろう苑」では午前中に施設所長による講演、午後に介護劇「甚平さんが呆けた」というコースの介護ツアーを実施している。元々介護劇は、地域の人たちに「痴呆とそのケア」についてわかりやすく伝えるために職員らの発案で始められたものらしい。介護ツアーとして正式に組み込まれたのは平成６年からであるから、今年で７年目である。施設職員さんが演じる鹿児島弁満載の介護劇は、聞き取れない部分もあったが演技も上手で、痴呆の状況と家族のとまどいや対処方法などをうまく表現していたようだ。来年度は 5 月から２ヶ月 1 回ペースで 6 回開催する予定である。元々介護ツアーは、地域や家族に人たちに介護や痴呆についての基礎的な話をメインとしていたものであったが、最近では施設関係者が多く視察されるようになったため、家族向けの内容とすべきか、施設管理者側向けの内容とするかを、施設長さんは悩まれている。

●大隅地域一体の介護支援体制を整えている

ここの施設で力を入れているのが通所介護であり、約 140 名の通所介護を受け入れており、マ



癒し・リハビリ・生きがいなどいろんな効果のある水耕栽培の園芸場「いきいきハウス」

イクロバス 18 台で、大隅地域を毎日送迎運行している。また、施設長さんの話で感心したのは、在宅化を図っていくためにパワーリハビリテーション（高齢者の動作性と体力向上を目的とし、介護予防・自立回復、介護軽減を目指すプログラム）や脳活性化リハビリテーションに取り組んでいることであった。特に脳活性化リハビリは、初期痴呆症状のある人に対して、脳に刺激を与えるゲームや運動を行うことによって痴呆症状を改善あるいは抑制に効果があるそうだ。痴呆は早く発見し、リハビリを受けさせることが大切である。ちなみに小ボケ、中ボケ、大ボケの目安は下表のとおりであるので、参考としていただければと思う。

○小ボケ（軽度痴呆）
1．無表情・無感動の傾向がみられる
2．ぼんやりしている事が多い
3．生きがいを覚えているふうがない
4．根気がまったく続かない
5．発想が乏しく、画一的になる
6．一日や一週間の計画が自分で立てられない
7．３つ以上の用事を同時に並行して片づけられない
8．反応が遅く動作がモタモタしている
9．同じ事を繰り返したり、尋ねたりする
10．相手の意見を聞かない

○中ボケ（中度痴呆）
1．何度教えても日付があやふやになる
2．身だしなみに無頓着になる
3．今までできていた家庭内の簡単な用事ができない（洗濯物の整理、草取り等）
4．ガス・風呂の火・電気の消し忘れ・水道の締め忘れが目立つ
5．料理がうまくできず、味付けが変になる
6．薬をちゃんと飲めないので、家族が注意する必要がある
7．季節や目的にあった洋服が選べない
8．昨日のできごとをすっかり忘れる
9．お金や持ち物のしまい場所を忘れ、盗まれたと騒ぐ
10．簡単な計算もできない

○大ボケ（重度痴呆）
1．同居家族の名前や関係がわからない
2．汚れた下着を、そのまま平気で着ている
3．服は一人で正しく着られず、上着に足を通したりする
4．風呂に入る事を嫌がる
5．食事したことを、すぐ忘れる
6．いる場所や自分の家がわからなくなる
7．家庭生活（食事・入浴・排泄）に介助が必要である
8．独り言や同じ言葉の繰り返しが多い
9．誰もいないのに「人がいる」と言ったりする
10．大小便に失敗し、その処理がうまくできない

※それぞれ１～10で４項目当てはまるとその対象のボケと判定

やごろう苑では、このように在宅化を図る試みによって 14 年度の家庭復帰率はなんと 85.5 %（470 件／ 557 件：全国平均では約４割程度といわれている）となっている。短い在宅では１～２週間の人もいるらしいが、この施設で驚異なのは半年以上家に帰っている人が６割以上もいることだ。これは、同居家族が多い農村地域だということもあるが、何と言っても少しでも親族を家で面倒見てあげたいという家族の理解が得られていることが大きいと思われる。

●いろんなことに効果がある園芸場「いきいきハウス」

施設内を見て回る時間は、昼休みの約 30 分程度しかなかったが、やごろう苑の裏側に、水耕栽培のビニールハウスがあった。ここではミニトマトやサラダ菜などを栽培しており、このお世話や手伝いを入所や通所の高齢者の方が行っている。

施設長の話では経営が厳しくなると最初に取り除かれる施設ではあろうが、リハビリ、生きがいづくり、レクリエーション、自分たちでつくったものが食べられるといった多様な効果があり、意義のある施設のようだ。ちなみに初期投資は3,000万円で年間維持費は200万円程度かかるらしい。

●家族への情報公開がサービス水準をアップさせている。

やごろう苑では、家族との連絡体制を密に保っていくことが介護の基本であるという考えから、世界の料理大会や料理コンテスト大会など家族が集まりやすいイベントや地域の人々にも参加しやすい企画も工夫している。また、開設当初から施設側が中心となって家族会を入所施設、通所とも組織し、家族同士及び家族と施設とのコミュニケ

ーションを図ってきた。しかし、数年後には家族者自らが家族会を運営するようになり、すでに親が亡くなったにもかかわらず、施設や他の家族とつながりを持っていたいということで、家族会のお世話係をやっている人もいる。各家族会が２～３ヶ月に１度実施されるが、この時に入居者一人ひとりの１ヶ月の療養日誌を報告するとともに、施設で起きた事故については、すべて家族会で事故に至った経緯や原因などをわかりやすく説明し、家族からの意見を求めている。施設側からすると、普通事故などは公開したくないことであろうが、情報開示することでお客さんから信頼を得ることができ、また、サービス水準の向上につながっているようだ。

サービス業は、一面では客のわがままな要求に応えることであり、極端なことを言えば、トラブル解決がサービス業の原点であるという話がある。まさにやごろう苑は、日常的・継続的になかなかできないサービス業の当たり前のことを行っているようにも感じられた。

（やまだ　たつお）

対州そば、インターネット交流体験記

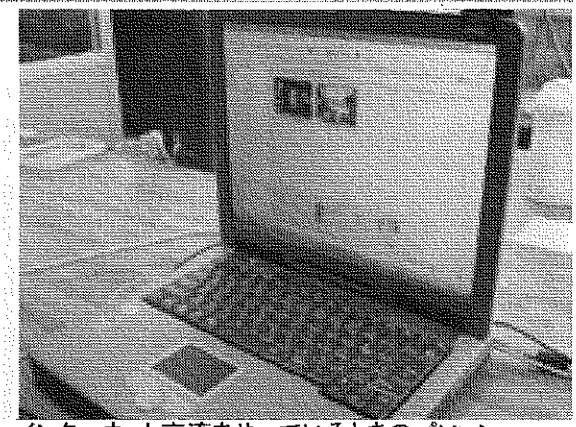
糸乗　貞喜

12月12日に、対馬の厳原まで出かけて、インターネット交流というものと、対州そばの味というものを体験してきた。以下はその報告記。

●まずはインターネット交流というものの体験から

パソコンというものが苦手な私は、日頃から「メールで送ってあるが……」とお叱りを受けているぐらいで、まことに気が進まなかった。とはいえ、都市計画家協会から、メール・電話・ファックスなどでヤイノヤイノと言われて、半ば強制的に対馬に行くことになった。とはいえ、地元のご婦人たちが、そば屋をやっているということに、興味はもっていた。

行ってみて、「協会」が主宰者であることに、やっと気がつく始末。前日に送ってもらった資料には、もちろん主宰者として協会の名が入っており、それをコピーして会場まで持っていったのだから、知らなかったということではない。端的にいうと、自分が主宰者側の人間であるという自覚がなかったということ。



インターネット交流をやっているときのパソコン

「案ずるより産むが安し」という言葉があるが、案じもしない主宰者がいても、交流は結構うまくいった。交流の仕組みは、東京がキー局になって、山形市の石臼館と対馬厳原町の体験であい塾“匠”を結んで、双方のそばをネタに交流するもので、なかなか面白かった。欲をいえば、私のような無知蒙昧な人間がいるときは、パソコンを二台用意して、コーディネーター用と交流用があればやりやすいとも思った。

後日談であるが、天神の事務所に帰ってきたとき、「いろいろ話がでていましたね」と言われて驚いた。上記三カ所以外でも、交流を聞く（見る）ことが出来、参加することもできるということで、マア大変な世の中になったもんだ。

●対州そばと山形のそばの感想

双方のそばを食べ比べてみる、というような話だったので「何ごとならん」と思っていた。その仕掛けは、前もって対馬のそば粉と山形のそば粉を交換しておき、双方でそれぞれの粉で打ったものを頂くということであった。

私は、対州そばの手打ちと、手捏ねしたうえで機械打ちし低温（－20度ぐらい）フリーズしたものと、山形のそば粉で打ったものと、三種類をいただいた。

そばは「香りを食べるもの」という偏見を持っている私の感想をいうと、香りは「対州そば」の手打ちが一番良かったように思う。いずれにしろ、どのそばも、どこに出しても恥ずかしくないぐらいの品質で、上々のそばを頂くことが出来た。

●フリーザーの話

実はこの話があったとき、あまり気が進まなかった理由は、対馬で島内の人を相手に少々粋がってみても、意味がないと思ったことである。対馬

交流のパソコンを見ながら、そばを食べ、発言をする

として島外の人を相手に稼ぐのでない限り、対馬が豊かになるわけではない。観光客といっても、そばを目標に来て頂くには、交通費が高すぎる。

そういう意味のことを含めて尋ねたところ、「低温冷凍」をして島外へ売っているという話がでた。それなら対馬が島外から「外貨」を稼ぐことになり、なかなか有望だと思った。

インターネット交流の中でも、「都市計画家協会の会員にも是非紹介してください」などと呼びかけたりした。東京からは、是非「協会会員割引を」とも言われた。しかしそれに返事が出来る人間はいなかった。やむを得ず、私が「これが割引価格なんですよ」と言ってごまかすしかなかった。この120ｇ入りの冷凍そばは、「つゆ付き」300円で、８袋=2,400円（送料、消費税別途）となっている。買って帰って試してみたが、四～五本がくっついたりしていて、湯がくのが難しかった。そばの味は十分していたのだが…。１億７千万円もかけた事業としては、冷凍材を300万円ほど節約したのが残念だ。

「返事が出来る人がいない」と書いたが、この事業の経営者というか責任者というか、マネージャーが誰なのかをしつこく尋ねてみたが、結局分からなかった。「島外への拡販を応援して欲しい」と言われたが、都市計画家協会の会員にしろ、私のネットワークの人々にしろ、「薦める」となれば何かあったとき、責任者がはっきりしていないのでは困るように思う。

この施設の建設には177百万円もかかっている。もちろん民間で出せるわけはないので、町役場が補助金などを得て建設したものだ。その施設を、農業機械利用組合が、減反対策として“そば栽培”をして、その販路として事業をしているようにも思えたが、大半のそばは農協に出しているということのようでもあった。その下に「匠運営協議会」という任意団体があるようで、そこが経営主体かとも思ったが、分からない。誰が事業の税務申告をしているのかも分からなかった。ひょっとすると役場が責任者かも分からない。いずれにしても、当事者を明確にして、販促活動をやればもっと伸びるように思うのだが。

（いとのり　さだよし）

所　員　近　況

宗像四塚縦走14kmで体力試し

最近は健康づくりや体力不足解消にウォーキングやトレッキングを行う人が増えているらしい。観光計画づくりなどをお手伝いをしているのだから、観光の芽になりそうなものは一度は経験してみないといけないなと思っていた。それにしても累積高低差1,200m、総延長14kmという道のりの大変さをまったく知らず、「これは大変な登山だぞ」と想像できるようになったのは、登山を出発して５分ぐらい経ったころだった。

四塚というのは福岡・北九州の両都市圏の自然的境界をなしている山地（日本図誌大系より）であり、湯川山（471m）、孔大寺山（499m）、金山（317m）、城山(369m)と４つの山がつらなる山地である。山の麓の宗像市の市役所には山岳部まであり、今回の縦走もそこの企画である。

最初に登る城山（じょうやま）は宗像大宮司の端城の一つがおかれたところなので、道の途中に眺望のよいところがあり、絶好の休憩場所になっている。疲れても景色を楽しんだり、地元の人で年間500回（朝夕２回）も登山している夫婦とすれ違うときに会話をしたりするので、ハイキングをしているという気分があった。しかし２つ目の金山登山からは、道の途中に眺望のよいところはほとんどなく、縦走をしている人もそれほどいないので、ひたすら頂上を目指して歩かないといけない。山の頂上付近には、松が大量に枯れているところがあったりと植生の変化が気になったりするのだが、質問しようにも息は上がってしまうし、質問してもわからないかもしれないと思うと、黙々歩いた方がよいという効率重視の考え方になってしまう。最初は15名（うち女性５名）が参加し

ていたのだが、３つ目の峠で女性２名がリタイヤされた。

最後の山はほとんど「四塚縦走の完走」という目的のためだけに歩いた感じになっていたのだが、頂上からは270度ぐらいに広がる玄界灘の海と海の正倉院ともいわれる沖の島を眺めることができ、完走したという達成感もあってかなり感動した。しかし、四塚縦走はハイキング入門にはとても向かないと思った。一日に４つも山を登ると、せっかく山頂についても、達成感よりも次の山が見えて「またあれだけ登るのか」という気持ちが先に出てしまうからである。縦走には「今日はまた山に登れる」という山への愛着が必要だと感じた。

（本田　正明）

■地域づくりは人づくりから

去年は、中国人学生のいろいろな事件が起こり、中国においても日本人学生だけでなく日本人が騒動を起こしました。日本人の中にもいろいろな人がいるように、いろいろな国々の人たちと共存する社会をつくることは、これから大変重要な問題と思います。

一昨年は中国の内モンゴルへ、昨年は北京・天津、そして南寧と、中国に行く機会が増えています。おそらく今年も何度か訪れることになると思いますが、若い世代のどん欲なまでの勉学への欲求には驚かされます。

中国の人口は日本の10倍で、まだまだ教育を受ける基盤は弱く、一人っ子政策の影響もあって、親の期待と投資は今後も確実に子どもたちに向けられて行くでしょう。すでに、若年世代は、「小皇帝」とも言われるように、大事に育てられ、親の愛情を一身に背負い、そういう親子の現場をみて納得もしました。豊かに成りつつある沿海部だけでなく、中国内陸部にもいずれそういう状況が表れてくると思います。

日本、中国、韓国、台湾など東アジアの地域では経済発展のために熾烈な競争がこれからも続くでしょう。これを担うための人材の育成、教育は各国においても重要なテーマであす。地域が元気を取り戻すためには、若者を増やすというだけでなく、様々な問題解策を実行していくことが必要でしょう。今年は、いろいろな面からの人材育成、人材教育をテーマに取り組みたいと思います。

（山辺　眞一）

■大横綱の孫、あらわる

当社にアルバイトできているＡ君という20代前半の若者（おにいちゃん）がいる。背はやや高く、どちらかと言えば細い。昨年度の末あたりから来てもらっていて、夏場は他のバイトでしばらくいなかったが、秋から再び来てもらっている。普段はおとなしく仕事をしているが、酒を飲むと結構強かったりする。バイトしながら音楽バンドをやって、ベースを弾いたりしているらしい。

そのＡ君、自分自身は生まれは東京で、今は福岡に住んでいるが、ルーツは大分の宇佐の方だと言っていた。

宇佐は宇佐神宮で有名だが、伝説の横綱双葉山の出身地でもある。その生家が残っていて、隣には「双葉の里」として記念館と物産館が数年前に出来ている。私は大関魁皇と同郷であり、大の相撲ファンであるので、この「双葉の里」にも興味があって、もののついでに最近行ってみた。

そこには大横綱双葉山の遺品や映像、69連勝を含む全星取表、それから大きな銅像があった。銅像の下には双葉山の本名が書いてあり、それはＡ君と同じ名字だった。田舎の方では、集落の大半が同じ名字なんてことはよくある。「これはもしかしたら一族か、親戚くらいかも知れんなあ」と、そのとき思った。

いつかＡ君に聞こうと思っていたのだが、最近、一緒に長く残業をしたとき、聞いてみた。

「宇佐で○○（Ａ君の名字）といったら双葉山の本名と同じよねえ。親戚か何か関係ある？」「ええ」。おっ、やっぱり。僕の勘はさえてるなあ、わくわくするなあ。「どんな関係なの？」「祖父です」「!!」予想を超えた返事にたじろぐ私。思わず聞いた。「祖父って、じいちゃんのことか？」

これはすごい話になった。しかし孫と言ってもたくさんいるだろう。「Ａ君のお父さんは何番目の子なの？」「長男です」・・・まさか。「Ａ君は？」「長男です」「!!!」直系かいっ。早く言えよ。

話を聞くと、双葉山はＡ君のお父さんが結婚する前に亡くなっていて、Ａ君は直接会っていない。Ａ君のお父さんもＡ君が幼い頃に亡くなったのだそうだ。だから、Ａ君自身も「僕にとっても伝説の人なんですよねえ」と実感なさそうに言ってい

た。

しかし、双葉山とくれば歴代の大横綱でも真っ先に名前の挙がる人であって、単に「私の祖父はお相撲さんでした」という話とレベルが違う。

この話、後日所員に話すと、皆びっくり。山田曰く「ビッグニュースやないか！何でだまっとったんや」、糸乗曰く「双葉山の孫が隣で仕事しよったんか！」。

これも、私がたまたまA君を知った後に双葉の里に行ったから気が付いたようなもので、順番が逆なら多分気付いていない。A君も、誰かが聞き出さなければ自分から言い出すことはなかっただろう。

もちろん本人が相撲を取る必要はないけれど、直接の話がもう少し伝わってないことと、本人に実感が薄いことがちょっと残念。

私が魁皇の姉と高校の同級生だなんて、全然遠い遠い。

（伊藤　聡）

▲観光するなら案内してくれる人がいるのがうんといいと思った

10月にいとこの結婚式で、初めて京都に行きました。観光するには1日（正確にいうと半日）しか時間がなかったので、最も？有名な清水寺と金閣寺にだけ行きました。

行くとこ行くとこ修学旅行の学生がいたのですが、3～4人一組でタクシーでまわっていて、タクシーの運転手がガイドまでしてあげていました。清水寺はテレビでみたこともあるせいか感じませんでしたが、金閣寺については歴史の授業で習ったぐらい（しかももうすっかり忘れてる）なので、タクシーの運転手の話を聞いている学生を見て、話を聞きながら見た方がもっと感動するだろうなと思いました。通りすがりに盗み聞きしてみたら、歴史的背景はもちろん、最近の金箔を貼り替えた話などしていて、また当たり前ですが京都弁なのが、京都に来ている実感を感じさせてくれていました。

まだまだ京都には見たいところがいっぱいあるので、今度は、見て聞いて触って匂って食して、と満喫しに行きたいと思います。

〈2003年のモットーって・・・〉

当社では、年明け最初の会議で1年間のモットーを言うようになってます。2003年の私のモットーは当時通っていたスポーツジムが閉店することになっていたので、「ジムを続ける」でした。が、未だに通っていません。

2004年は過去の事はさっぱり忘れて心機一転がんばろうと思います。

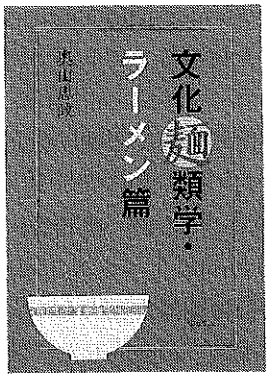
（佐伯　明日香）

▲消費者の心は秋の空か？

昨年の11月末、小生が住む香椎浜に巨大なショピングセンター「イオン香椎浜」が完成した。我が住まいから歩いて5分で行ける場所である。商業面積は約3万4千㎡。工事中、小生の連合いは「大根1本、さかな2～3匹買うのに何で大きな店舗まで行かないといけないの。大きなお店では買い物もしにくいし、今まで通っていた地場のスーパーで十分」などと言っていた。しかし、イオンがオープンして2～3日が経ったある日のこと「私、イオンにはまってしまった。パンの種類は多く、レジも多くて時間もかからない」とのたまうではないか。まさに消費者の心は浮き草のごとくである。

小生も日曜日の夕方5時ごろに調査研究と思い、出かけてみたが、オープンしてまだ1週間目というだけあって、食料品売場と食堂街は年末のデパ地下の人混みであった。出店しているお店は洋服店、靴屋、飲食店など、東区千代にあるライバル店舗とさして変わりはなく、物売りの目新しさはないものの、洋服関係とレストランは種類は多いように感じられた。ここでは香椎商店街にあった店もイオンの方にくら替えしたとも聞く。この巨大ショピングセンターの進出は、近くの地場スーパーをはじめ、香椎の既存商店街、そして香椎商店街に隣接しているダイエーにとって厳しい状況になりそうだと感じられた。

（山田　龍雄）



『文化麺類学・ラーメン篇』

奥山忠政著
明石書店刊

北風が吹く寒い季節となりました。こんな季節は、あつあつのスープに入った麺をふうふうと口でさましながら食べて、心身共に温まる機会が多いのではないでしょうか。

さて、ここで問題です。

Q1：中国で「麺料理」はいつ誕生したでしょうか？

Q2：日本で最も古い麺は何でしょう？

Q3：日本の屋台はいつ頃から盛んになったでしょうか？

Q4：人はなぜラーメンに惹かれるのでしょうか？

その答えは・・・。（最後にあります）

この本の表紙をみて気づきましたが自宅から駅までの自転車でわずか10分の距離の間にざっと数えて５件ものラーメン店がありました。“ラーメン”と聞いて私が思い浮かべるのは、小学生の頃、土曜日のお昼によく食べていた、もやしがたくさん入ったラーメンです。半ドンでわくわくしていたこともあってか、袋麺といえども、とびきりおいしかった記憶があります。大人になり、店に入ってラーメンを食べる機会が増えて、「ここのチャーシューはトロっとして、スープも豚骨なのにさらっとしていておいしいなぁ」と思うこともあるのですが、それでもやっぱり“ラーメン”というと土曜日のもやしラーメンを思いつくのです。本文中の「ラーメンの誕生と広がり」の中にカップラーメンを手に歩行者天国を歩く若者の写真があります。“ラーメン”にまつわるエピソードは、人それぞれで結構おもしろそうです。

こんなに身近なラーメンについて、この本では麺の紀元に始まり、発展、文芸作品にまつわるラーメン、ラーメン店の開業の方法まで幅広く書いてあり、著者のラーメン研究のきっかけである「ラーメンは食文化である」という熱い思い入れが伝わってくる１冊です。この本を片手に寒い夜はラーメン談義などいかがでしょう。

（愛甲　美帆）

Q1の答え：後漢時代（103？～170年）もしくは北魏から東魏（540年前後）の２説ある。

Q2の答え：遣唐使（804年）とともに渡った空海が讃岐ウドンをもたらしたといわれる。

後は、本文中のお楽しみ。

糸島じねん交流パーティーのお知らせ

日時　2004年01月17日（土）
場所　糸島郡志摩町馬場157　糸乗宅
　　TEL&FAX　092-327-2477(327-3889)
出し物（予定）
　手打ちそば
　イノシシ肉の炭焼き
　栃餅のぜんざい
　持ち込み歓迎（但し事前連絡をお願いします）
参加希望　㈱よかネットor糸乗に連絡のこと

編集後記

■本号でも話題の竹林問題。社内でも度々話題になっている。竹は手入れが悪く密集してくると、養分を求めて広がり出すのだそうだ。すごい勢いで広がる竹林を見ているとゾッとする。タケノコ、竹炭、竹製品。それでも追いつかない。何かいい方法はないのだろうか。（伊）

■向田邦子原作の映画「阿修羅のごとく」を見ました。この中のラーメンの１シーンが今号紹介している本でも偶然取り上げられています。映画では、昭和を感じさせる工夫が随所にあり見所である女性の心の機微が、鮮やかに迫ってきました。今お手伝いしている男女共同参画社会推進の仕事の参考にもなりました。ドラマは私が生まれた25年前に放映されていて、それを25歳になった私が映画で見たことに不思議な巡り合わせを感じたこの頃です。（あ）

よかネット　No. 67　2004. 1
（編集・発行）
㈱よかネット
〒810-0001 福岡市中央区天神1-15-35 ホンダハピエ5F
TEL 092-731-7671　FAX 092-731-7673
http://www.yokanet.com
mail:info@yokanet.com
（ネットワーク会社）
㈱地域計画建築研究所
本社　京都事務所　TEL 075-221-5132
大阪事務所　TEL 06-6942-5732
東京事務所　TEL 042-501-5231
名古屋事務所　TEL 052-265-2401
㈱地域計画・名古屋